

# はくがんさん



本年も宜しくお願い申し上げます。  
お婆さんは99歳、大洋6年生、  
采海5年生になります。

第88号 H26年正月号  
伊豆市 法住寺 発行

## 「寿量の祈り 感謝と敬意」

大自然 ありがとうございます  
社会の皆さん ありがとうございます  
ご先祖さま、家族の皆さん ありがとうございます

南無妙法蓮華經

## 大らかにのびやかに和顔で

この寒い季節は北国、佐渡での日蓮大聖人を想う。文永八年龍の口の法難後、荒波の日本海を渡り佐渡にお着きになったのは今の暦で云えば十二月十日頃であった。『人里からはるかに離れた塚原三昧堂という一間四面の堂があった。天上の板は隙間だらけで、四方の壁は破れている。雨が降り込むことは外のようにであり、雪はこの堂の内に積もる、仏像はなく、畳やムシロは一枚もない（妙法尼御前御返事）』このお堂で困苦欠乏の日々が始まる。

房総小湊ご出身の大聖人にとって佐渡の寒さは身にこたえた。しかし何としても人々を救いたい、救わねばならないという使命感から心は澄みきっていた。そして魂を込めて現代の私たちに教えを伝えてくださった。

\*

世の人々を救うことの出来るのは法華經しかない。それはあらゆる經典を学び人々の生活、世相を見て大聖人は確信した。そして深遠甚大な法華經を実践し易いようにと「南無妙法蓮華經」の七字に込めお唱えになった。ひたすらに「南無妙法蓮華經」をお唱えし信ずれば、その功德を頂くことができ安らぐこ

とができると教示された。大聖人の目は当時の鎌倉時代だけでなく、現代の私たちを見据えたものであった。

\*

私たちにあって、貧困、病氣、災害、人間関係と、迷ったり苦しんだり悩んだりすることは多い。

だからこそ南無妙法蓮華經のお題目を心の柱、大黒柱として持つて欲しい。

大聖人が教示するお題目とは、どんな苦難に出会ってもこれを切りひらく心の能力を自分のものにするということである。

\*

新しい年を迎え、私たちが日々の中でお題目を持つとはどういうことだろう。

それはたとえ苦しくとも辛くとも柔軟に、これが現実だと先ずは認め受け止めることだと思ふ。苦渋に満ちた顔になりがちだが、それでは現実はますます悪くなる。気持ちは大らかに伸びやかに愉快に、そして穏やかな笑顔・和顔で人に接し、人を想って生活する。それが苦難を切りひらく能力、大聖人の教示するお題目であろう。

\*

本年も宜しくお願い申し上げます。合掌

# 謹賀新年



## 法住寺護持会

〔総代、護持会長〕 伊東 修

〔総代、副会長〕 杉山 勲

〔総代〕 森野道雄

室野義雄（世話人代表）

〔顧問〕 山下 一

〔世話人〕 伊東 徹、伊東由廣、伊東幸二、

室野義雄、山下秀治、土屋正次、

小塚健治、佐藤 薫、佐藤敏明

〔監査〕 杉山 修、室野好信

## 中伊豆立正大題目講（当山）

〔副会長〕 伊東はつ江

〔顧問〕 小塚 勝

〔世話人〕 山下 要、井本まつ、三田五月、

山下しづか、伊東すゑ子、伊東ちゑ子、

三田幸子、山崎まち、伊東通子、

伊東ミナヨ、滑川正勝、滑川美奈江

山下 一、森野一夫、小塚正司、

山下 清、小塚貞夫、小塚康清、

山本宏衛、小塚愛子、森野はま江、

山下千代子、佐藤雄一、佐藤賢吾、

佐藤秀夫、杉山しまゑ、山本義富

## 伊豆連合大題目講（当山）

〔副会長、理事〕 山下 要

## お寺の庭に花いっぱい

昌子寺庭の山務日誌より

縁あって地元の女性合唱団の指導に携わって二十五年がたった。思えば感慨深いものがそこにある。私を含めてメンバーのほとんどが日々の仕事をめいっぱい勤めていて、月二回の練習に走って集まった。練習時間は一時間三〇分足らず。ゆえに集中力はかなりきたえられた。その中でお互いに認め合って支え合うことも学んだ。そして指導者たる私にも気付くことがあった。それは一人ひとりの声の個性は無くさなくても良いが、息の流れる方向を揃えること

は出来るということだった。又これでもかと思いを張り上げるよりも控えめに控えめにしていくと心の内面性が残ることも気付きの一つだった。心をひとつに歌うことで人は祈り浄化される。声が熟成されると共に、歌う人自身も成熟していくのではないかと思えるほどだ。

\*

先日、練習場として長い間使わせてもらった中央公民館が閉館になるというので、感謝の気持ちを込めて歌おうということになった。その日は舞台の上に「さようなら ありがとう」というような看板が掲げられ、手作りの花が添えられた。私たちが歌い始めて、そこで不思議なことがおこった。歌っている最中に、その花のひとつがひらりと舞い降りた。偶然に落ちたと云えばそれまでだが、私にはこの老朽化した公民館に感謝の「ありがとう」の気持ちが届いて感応してくれたのだと思える出来事だった。次なる歌は

つゆのごとくに

坂村真民 作詞

いろいろのことありぬ  
いろいろのめにあいぬ



昭和63年スタート、「中伊豆コールあじさい」として25年間活動してきました。

# トピックス

ふるさとにコーラス流る小春かな  
 小春日や指揮者の指の美しきかな  
 修愚  
 夢女

◎「中伊豆コールあじさい」25周年コンサートで、嬉しいお便りを頂きました。

本年もよろしくお願いもうしあげます。

これからまた  
 いろいろのことあらん  
 いろいろのめにあわん  
 されどきようよりは  
 かなしみも  
 くるしみも  
 きよめまるめて  
 ころころと  
 ころがしゆかん  
 さらさらと  
 おとしてゆかん  
 いものはの  
 つゆのごとくに

## ◎前役員さんへ感謝状

昨年お会式の折、前役員さんに任職から感謝状をお贈り致しました。改めて長年のご尽力に感謝申し上げます。

尚、山下一様、佐藤雄一様、山下要様には長年の法労を讃え、お曼荼羅御本尊を謹書させて頂きました。

## ◎全国五十七本山めぐり

小塚順一さんご夫妻が日蓮宗本山を全部お詣りし、ご首題を頂きました。北は仙台から南は九州佐賀まで五十七本山、全部まわり

感謝状贈呈 御芳名 [H25.10 お会式にて]

山下 一様	総代	H8~25	6期	17年間
	護持会長	H16~25	3期	9年間
佐藤雄一様	総代	H16~25	3期	9年間
山下 要様	世話人	H13~25	4期	12年間
	[世話人	H19~25	2期	6年間]
	飯田 忠様	小塚順一様		
	[世話人	H22~25	1期	3年間]
	飯田政春様、室野好信様、山下誠次様、			
	森野健次様、山田安夫様、杉山修様			
	[監査役	H16~25	3期	9年間]
	佐藤賢吾様、小塚康清様			

## 全国本山のご首題帳を手に、小塚ご夫妻



にこのたび成就されました。

切ることはなかなか出来ることではありません。六十歳を機に三年間、信心と仏縁と気力体力、そうした諸々のご縁が必要で、大したものです。その度ごとに本堂にお詣りされ、無事

## ◎整備作業

年末の境内作業は西地区の皆さんが、第一



墓地急斜面  
 草刈りの足  
 場づくり、  
 鉄塔山の南  
 斜面、孟宗  
 竹処理など  
 ご奉仕くだ  
 さいました。  
 何時も、  
 ありがとうございます。  
 ございます。

◎星祭の 一月二十六日(日)

水行 午後一時四十分 御祈祷会 二時

一年の安泰と毎日のご守護を祈り、善い運氣を頂きましょう。

詳しくは別紙、ホームページをご覧ください。また遠慮なくお問い合わせください。



今年午年。自分の嫌な面はウマれ変わりたい、ウマイものを食べたい、何でもウマくいくように。あれもしたい、これもしたい。新年早々そう願う私に「欲をかき過ぎないように」と慈悲の眼差しで見守って下さる仏さま、そして皆さま、本当にいつもいつもありがとうございます。今年も宜しくお願い致します。

\*

御志納金「十一月〜十二月」

西 杉山 博行 殿 尊父葬儀  
熱海市 三田村 竦 殿 先祖佐藤家供養  
大仁 富田 正昭 殿 尊父菩提供養  
伊豆市 森 慶仁 殿 寿量の塔納骨砌

物事は沢山のご縁で成り立っています。例えば、食事。牛、豚、魚、お米、野菜など食材の命のご縁。材料を作ってくれた方、料理をしてくれた方、料理の際に使う道具を作ってくれた方のご縁。沢山のご縁を頂き食事が出来ています。

また、当たり前だからこそ忘れかけていること。それは、私たちは一人で生まれ、育て来たのではないということです。お釈迦さまは「人の此の世に生まるるは、宿業を因とし、父母を縁とせり。父にあらざれば生ぜず、母にあらざれば育われず」と説かれました。どんな親であろうとも、今の自分は、その親なくしては生まれもせず、育つことも無かつたのです。

\*

先日、ある方のお葬儀がありました。その時の父を亡くしたAさんとの話です。

Aさんの父親は、漁師町育ちで意気が良く、情があり、地域の信頼も厚い方でした。その一方で、毎日お酒を飲み、気を高ぶらせる時もしばしば。そんな父に、昔から愛情を感じたいと思いつつも、お酒を飲み、短気になる父を見ると、自分の心が曇り、素直にそれを感じることが出来ずにいました。亡くなる数か月前のある日、体調を崩した

父は、医者からお酒を止められました。それからは禁酒の日々。この日からAさんは、今までに見たことのない父を感じたそうです。2時間程かかる病院の送り迎えの際は、今まで出来なかった分までいろいろな話をし、親身に相談に乗ってくれたのです。今まで感じられなかった親が子を案ずる気持、父の愛情と優しさを心から感じ、本当に嬉しかったことを話してくれました。

そう感じる父親の姿を、最期の数か月間、仏さまはAさんに見せてくれたのだと思います。Aさんの、生前の父には恥ずかしく、どこか抵抗があつて言えなかった「父と母の子供に産まれて良かった。育て見守ってくれてありがとう」の本心の言葉。最高の送る言葉のご供養だったでしょう。お題目と一緒に唱えながら、父親の魂にAさんの思う感謝の言葉が伝わったと感じました。きっとこれからも気持ち添えたご供養をされていくこととでしょう。

\*

日蓮聖人のご遺文(亡持経事)「我が頭は、父母の頭。我が足は、父母の足。我が十指は、父母の十指。我が口は、父母の口」改めて心に留め、今を、そして今出来る事を大切にしたいものです。